

異文化理解における「文化テキスト」の読みと認識

小川 貴士

キーワード：学習者中心 文化の客観的な実体 文化テキスト 認識の枠組み 通過点
〔要旨〕 日本事情のカリキュラムには学習者中心の考え方が必要である。文化認識における学習者中心というのは、解釈される対象としての文化（有形のものであれ、無形のものであれ）には客観的な実体がないという認識論に基づいている。こうした文化の実体の曖昧性は、日本人論の変遷を見る時、「日本文化」が様々な姿で記述されている事実にも現れている。実際のクラス活動としては、「文化認識というのは常に通過点である」という立場で、教員（或いは、日本人）が持っている文化認識に収斂させてゆく方向は避け、学習者一人一人が感じる個々の論点を次のステップに繋げてゆくような指導が肝要である。

1. はじめに

日本語教育と並行して行われている日本事情教育（または、文化プログラム）は、一般的に、現代日本社会の諸相を理解することによって日本語の学習を補完し、現実に日本での生活を円滑にするためのカリキュラムと考えられている。嘗て、日本事情のクラスは日本語教育の付随的なものとして捉えられていたが、近年の日本語学習者の数の伸び、そして多様化に伴い、日本事情のクラスも内容、方法論の点で変化の傾向にある。特に注目されるべきは「学習者中心」という概念である。日本事情のクラスにおいて「学習者中心」という場合、①学習者のニーズに合わせ、学習者が自発的にテーマ及び教材を選択する、という教育方法論上の概念と、②認識される文化事象は学習者（認識者）によってその姿が違ふ、という認識論上の概念の二つがある。①については、『日本語教育』65号などでも論じられているように、様々な知見が出されているが、そうした学習姿勢によって到達する「文化の認識」については、多くの場合、日本人が認識している日本文化の姿を理解させることがコースの目的として無意識に設定されているように思われる。換言すれば、日本人による日本文化の理解が「正しい」ものであるという盲目的な前提があるということだが、そうした認識そのものについては未だ十分な議論がなされていない。そこで、②の概念について議論してみる必要がある。

最近、日本事情のクラスと日本語のクラスのオーバーラップ化が進み、語学教材に文化的広がりを持たせようとする試みが多く見られる。こうした試行は評価されるべきものであるが、文化を教科書で扱う際に或る種のステレオタイプを提示するに止まったり、一面的な見方で文化の解説をするといったような、文化の認識についての議論を欠いたまま

の方法では逆に異文化間のコミュニケーションの障害となる危険性さえある。(例えば、互いの文化の異質性を強調することによって、意志疎通が難しいものだという観念を作り上げてしまう可能性など。)

日本事情のクラスでも、前述のの視点を欠いている場合、形を持った文化(例えば、歌舞伎などの舞台芸術や建築物、茶器など)も無形の文化(社会思想、価値観、組織、人間関係など)も、紹介する際に日本人の視点で眺めた日本文化の姿を紹介している傾向があり、学習者(文化の認識者)を中心にしているかどうか疑問がある。或いは、学習者の日本文化認識が日本人の見方と異なる場合、それを「間違い」とする傾向があることも否定できない。そこで扱う教材も、例えば、社会現象が集約されていると一般に考えられているジャーナリズムの記述を用いる場合、そこに書かれている事柄を紹介するだけでなく、その記述がどのような取捨選択の枠組みで、また、誰が書き手で誰が読み手と考えられて書かれているのかについても議論しなくては不十分であろう。こうした実際のクラス活動や教材を背景として、拙稿の前半では、日本語教育において日本文化を扱う際に求められる以下の点について議論する。1)戦後の内外の日本文化論を俯瞰しながら、記述者の文化的背景による日本文化の変容、また、文化論の受容に見られる日本人の反応など、換言すれば、「メタ文化論的な視座」と 2) こうしたメタ文化論を支える認識論の理論的枠組みの二点である。

小論の後半では、具体的な例を通して、日本事情のクラスをどう展開してゆくかについて幾つかの提言を行ってみたいと思う。尚、日本事情のクラスは言語能力との関連を考えながら行われているものであるが、この稿では紙幅の関係で言語能力との関連については扱わないことを予め記しておく。

2. 戦後の「日本文化論」について

戦後、研究書だけでなく、一般書としての日本文化論が書架を賑わし、様々な形で我々の耳目に触れ、議論されてきた。ここでは青木(1990)の視点を軸にししながら、日本文化論の変遷を俯瞰してみたい。

青木は、戦後の内外の日本文化論の変容を、①「否定的特殊性の認識」、②「歴史的相対性の認識」、③「肯定的特殊性の認識」、そして④「特殊から普遍へ」の四つに区分している。①は、戦後10年程の間見られた思潮で、明治以降の、所謂「日本的伝統」を非近代的なものとして否定的に記述した時代であり、②は、1950年代中頃から1960年代中頃まで見られた、西欧との類似性や並行的な発展を指摘した論調である。続いて、③は経済の高度成長と経済的繁栄の時代に論じられた文化論の特徴で、かつて非近代的と見られた日本の「伝統的」特徴を肯定的に評価する論調である。この時期に『ジャパン・アズ・ナンバー

ワン』など海外の識者達から日本の異質性を肯定的に評価する論が出された事実も③に含まれている。⁽¹⁾ ④は、1980年代後半からの安定成長期と軌を一にし、①から③まで「経済」と「技術」に左右されてきた文化論の見直しを図る立場である。

青木はここで、文化論が書かれる時代的環境（主に経済的な豊かさのレベル）によって文化の記述が変わるという点を指摘している。そして、そこから「文化」という概念は、非常に流動的なもの、曖昧なものである、という考えが導き出せる。即ち、文化論に書かれたものが文化そのものではなく、文化論自体も変容するものだというメタ文化論的視点が提示されているのである。

文化の流動性・曖昧性は文化人類学者ベフ（1992）によっても論じられている。ベフは海外の研究者の日本文化論を比較検討し、それぞれの日本文化の記述に書き手の文化性が反映されると主張する。更に、日本人自身が論じる日本文化論にも言及し、独自性を強調する傾向などがあることを指摘している。つまり、ここでも、記述される日本文化の実体は何か確固たるものとして存在しているのではなく、認識者によってその姿を変化させるものであることが確認されている。

これに加え、社会学の分野では、現代における文化論で記述された「伝統文化」は、既に現代社会に合わせて書き換えられた「伝統文化」であり、そうした文化論が大衆に「消費」される（つまり、読まれる）ことによって民族的・文化的アイデンティティーが「創造」され、「促進」されるという議論がなされている。⁽²⁾ こうした「伝統意識の創造」過程は、政治的主張や産業界の経営的動機付けなどに関わっている場合もあるので、非常に複雑な形をしているのだが、文化記述という点に絞って見れば、ここでも、文化論に記述されたものは文化そのものではないという主張を見ることができる。

3 . 認識者と認識対象

認識者に焦点を当てて認識対象を考えるこうした見方は、文芸批評における解釈論の分野で議論が積み重ねられてきた。文学作品を歴史的な脈や作者、読者などから切り離し、一種の構造物として「客観的・科学的」に分析しようとした新批評（New Criticism）に対し、Fishらが、読むプロセスを意識した論（読者反応理論）を展開した。読むプロセスを重要視するという事は、読み手を解釈の中を含むということであり、読者の持つ解釈の基盤によって作品の内容が変化することを意味する。また、Jauß や Iserらの主張する「受容理論（受容美学）」でも、「テキスト」と「作品」を区別し、物理的存在としてのテキストと「読む」という行為の中にだけ存在する姿としての作品を、対峙する概念として定義している。即ち、文学のテキストには決まった実体というものがなく、認識者とテキストが相互に働きかけながら一つ一つの「作品」が形造られるという考え方である。

読者反応理論も受容理論も、読み手の認識の枠組みや知識の総体、また、解釈の前提となっている事項（意識的なものも無意識的なものも両方含め）などに光を当て、読み手の「読む行為」を作品成立の不可欠の条件として位置付け、更に、そうした要素が積極的にテキストに働きかけてゆくという見方をしたところにその特徴がある。即ち、認識の対象物は実体としては存在せず、解釈という経験を通じてのみ存在し、その際、認識者の意識が重要な役割を果たしているというわけである。

4. 文化事象の認識

前章では、文学テキストにおける認識と認識対象について議論した。しかし、認識対象と認識者を論じる場合、テキストを文学の分野に限る必要はなかろう。「テキスト」に「認識され、解釈されるもの」という広義の意味を与えれば、文化事象まで含めることが可能である。即ち、「文化テキスト」という概念を設定することができる。ここに日本事情のクラスと解釈論の接点が見出せるのである。

解釈される文化事象は、有形であれ無形であれ、「文化テキスト」として存在している。学習者中心の認識方法を日本事情のクラスにいかにか持ち込むか、そして、いかに有機的に機能させるかは、それぞれの文化テキストが認識者によって姿を変えて現れる（或いは、個人の「経験」としてしか文化事象が存在しない）という点を、教員の持つ認識とのダイナミズムの中で捉えるクラス活動にかかっている。

指針となる文献としては、倉地（1992）と細川（1994）がある。倉地は心理学の可変理論に基づき、学習者が日本での生活一般（対人関係など）についての作文を定期的に提出し、それに対して教師がフィードバックをしてゆく作業を積み重ねる「ジャーナルアプローチ」を提唱している。ジャーナルアプローチは、作文活動を成績の評価とは無関係にすることにより、学習者の感じ方を中心においてコースを展開することを可能にするが、扱う文化事象として前述の「無形の文化」に主に焦点を当てている。

一方、細川は、経験主義的な立場から、具体的な教材と教室活動を豊富に提示している。しかし、細川の著作では文化認識の理論的な議論が十分に著されているとは言い難い。

この両者は筆者と理論的基盤を異にするが、前述したように日本事情のクラスのあり方（特に、学習者中心のクラス）を様々な角度から論じることが現在求められているわけであるから、その意味では、文芸批評論—日本人・日本文化論という線から、「文化テキスト」という概念を設定し、反映させてゆくことは日本語教育の一視座として意味があることと思われる。

5 . 具体例

ここまで議論してきた概念を踏まえながら、一般に日本の伝統芸能と考えられている歌舞伎（前述の「有形の文化」に含めてよいと思うが）を見た学習者がそれをどのような文化事象として捉えたかの記述を具体例として考察を進めてみたい。⁽³⁾

[認識者1の記述]

私にとって歌舞伎は、「日本」を定義する時に極めて重要な要素を持っている。

カリフォルニアから日本に来て以来、私は常に日本文化の中にある矛盾といったものを感じている。それは、純粋な日本の精神と外国のもの（例えばアメリカのもの）に対する憧れが混在していることである。日本人は、皆、アメリカ人の食生活が健康に良くないことを知っていながら、どうしてマクドナルドで朝食を取り、ドムドムでお昼を済ませ、セブンイレブンのスパゲッティを夕食にしたりするのだろうか。日本人には、外国のやり方と日本的なやり方を融合させることを望み、同時に自らの伝統文化の価値に疑問を持ち続ける精神があるのではないだろうか。

具体的には、歌舞伎の中にこの文化的融合の精神と伝統文化に対する自信のなさが見られるように思う。歌舞伎役者猿之助は、三、四百年も続くこの舞台芸術を若い世代に受けるように電気仕掛けの花火など最新の技術を用いたり、鳥（小天狗）の舞などアメリカのミュージカルの演出方法を使ったりしている。こうしたことには、従来の舞台演出では十分に観客を惹き付けることができないのではないかという自信の無さが伺える。

しかし、私にとっては、こういうことも、また、「日本」であるのだ。明治になって侍が刀をペンに持ち替えて技術者になっていったように、現代でも何百年の伝統を持つ舞台芸術が最新式の仕掛けによって変えられてゆく。こうした過去からのものに対する敬意と非日本的なものの融合を常に図ろうとする精神こそ日本のパラドックスであり、歌舞伎はそれをよく体現するものだと思う。

[認識者2の記述]

私は三年前に広島県三原という小さな町でホームステイを経験した。そこでの印象の全てが日本の姿であった私には東京に来て大きなショックを受けた。東京と広島は、控え目に言っても、全くの別世界である。東京がとても「西洋化」してしまっていることはとても残念である。東京にいても、本当に「日本的な」経験をしてい

るとは感じられない。東京以外の場所を旅行したことが無い人達をとててもかわいそうに思う。東京は、少なくとも私にとって本当の日本ではなく、単に西洋化してしまった日本に過ぎない。

しかし、歌舞伎は、そんな東京の真ん中で演じられているにも拘らず、本当に日本的なものであった。歌舞伎は伝統的な芸術であり、私たちが見た舞台は長い間変わらず演じられてきたやり方で演じられた。私は、英語の説明を聞くために付けていたイヤフォンガイドですら歌舞伎の魅力をそぐような気がして残念に思ったくらいである。舞台装置と衣装は美しく、かつシンプルであった（例えば、回り舞台は電気でなく人力で動いている）。また、三味線の実演を初め聞く機会でもあった。そして、観衆も私にとっては本当の日本であった。着物を着た年輩の方がおり、少し飽きてしまった若い人達がいると同時に、熱心に見つめる若者もいる。小さい子供と来ている家族や十代の子供と一緒にの家族など、あらゆる種類の家族がいた。着物の女性と流行りのファッションの女性など、伝統的な日本と新しい日本が一緒になった姿がそこにあった。また、食事もファストフードではなく、寿司やお弁当といったものだった。

認識者3は、演じられるものとしての歌舞伎からやや離れて、次のような観察をしている。

[認識者3の記述]

私は江戸時代についてかなり勉強し、歌舞伎の起源についても少し学んだので、歌舞伎の演し物の話の筋をいくつか知っている。だから、猿之助がこの演し物を90年代の観衆のためにどう変えたかに興味があった。実際、猿之助の舞台演出については長い評論が書けそうであるが、ここでは日本の観衆について語りたいと思う。日本の観衆に混じって観劇に参加したこの経験は、私にとって驚きであり、西洋の観衆の行動と際立った対比を感じさせた。歌舞伎では、役者の名前や、役者の属する派を大声で叫ぶ習慣があり、大変興味深い。しかし、それよりも劇場内で観客が飲んだり食べたりしていることに大変驚いた。また、日本の観衆は、劇の最中で必ずしも静かではなかった。加えて、日本の観客がグループごとに幕間の休憩時間に館内のレストランで食事をし、売店で買い物を楽しんだりすることも私にとっては驚きであった。劇場そのものが、あたかも一つの独立した総合体として機能しているようである。

上記の三つの記述は、同じ舞台を見た三者の感想である。日本語教育の現場の教師であ

れば、こうした感想の差は日常茶飯のことであろう。認識者1は母文化での演劇の勉強を背景とし、認識者2は日本の一地方での生活体験を背景として歌舞伎の舞台を受容している。また、認識者3はアメリカでの観劇経験を基に日本人の観劇スタイルを観察している。

拙稿の前半部で論じた文化認識論に基づけば、この場合、「観劇空間としての歌舞伎」が文化テキストとして存在しており、その文化テキストを認識者1は「西洋ミュージカルとの折衷」として、認識者2は「美しい伝統文化」として、そして認識者3は「有機体としての劇場」としてそれぞれ“読んで”いるわけである。

ここで、日本事情担当の教員にとっての問題は、こうした別々の認識をどういう方向で指導してゆくかという点である。前に論じたように、彼らの認識を、教師が日本人として認識している歌舞伎の姿に収斂させて行く必要はない。勿論、それぞれの認識者が認識を進める過程で、教師の持つ歌舞伎観を議論の叩き台として学習者に提示することは必要であろう。しかし、より大切な点は、一つの認識を常に「通過点」として次に続くタスクを与えてゆくことであろう。例えば、認識者1の場合、「伝統と技術」、「舞台演出の東西」といった問題を提起しているので、歌舞伎の中でこれらの問題がどう扱われているのか更に追求してみる方向性を提示し、具体的には、個人タスクとして歌舞伎座の舞台担当者へのインタビューを課題にしたりする活動が考えられる（ここまで出来れば日本語の勉強としても理想的であるが）。認識者2には「文化紹介と外国語」、「観衆と舞台」といったテーマで更に新しい試みを与えてみるなど、があろう。また、認識者3には相撲や歌舞伎などに見られる、飲食サービス付きの「社交の場としての娯楽空間」というテーマを提示しながら、能楽堂のように社交性がより低い観劇空間を歌舞伎と対峙して提示し、それに参加させてみるなどの活動が考えられる。

こうした一連のタスクを行った後の認識者は次の「通過点」に到達する。クラス活動としてはその時点で報告や発表、討論などを行うことが望ましいが、教員側の評価と指導としては「文化の認識は常に通過点である」という立場に立って継続的な展開を促してゆくことが肝要である。

また、これに加えて、認識者自身ががどういう理解の枠組みを持っているか意識化する点も見逃してはならない。例えば、[認識者1]の場合、アメリカでの演劇が認識の枠組みの一部を形成していると考えられるが、それを認識者1自身がどのように評価しているのか、また、逆に、歌舞伎で感じたことを仮に枠組みとして設定して母文化での演劇を論じてみるとどうなるかという問い掛けなどを通じて、自分の認識の枠組みについて考えさせることができる。一方、[認識者3]の場合、「飲食を共にする社交の場としての観劇」という概念がアメリカの劇産業では可能か、また不可能であれば、なぜ不可能なのかという問いを通じて、認識者自身がアメリカ観劇文化の前提を振り返って考えてみることができる。こうした活動は、日本文化を直接理解することにはならないように見えるが、前述

の理論的立場に立てば、自分に対して日本文化がどのような形で姿を現わすかということと深く関係していることなので、非常に大切なことと言えるのではないだろうか。

6 . まとめ

これまで見てきたように、日本人論の変容の歴史から、そして、文芸批評論による認識と解釈についての知見から、以下の点が日本事情指導の際の基礎となる。

日本人が認識する日本文化が必ずしも「正しい」ものではない
文化の客観的実体は存在しない
認識者の意識によって文化事象の姿は変容する

そして、実際のクラスでは「文化認識は常に通過点である」という視点で、有形・無形の文化事象提示（参加）、認識者の認識を中心にした議論（教員側の認識提示も含め）、認識者が特に取り上げた点のフォローアップ（追跡調査など）、認識者自身の認識の枠組みの意識化という活動を繰り返してゆくことになる。

今回のアンケートでは、一時点での文化記述にとどまったが、今後もこうした視点から同一認識者の継続的、追跡的な調査を続け、現時点での認識が時間や経験とともにどのように変わってゆくのか、その検討を次稿に繋げてゆきたいと思う。

日本事情クラス（文化プログラム）の位置付けは、国によっても様々であろうし、国内においてさえ、機関によって異なっている。今後も、様々な理論や立場から議論され、考え方と具体的な活動報告が日本語教育に携わる人々によって共有されてゆくことが肝要である。その意味で、本稿も一石となれば、と願っている。

注

- (1) 『ジャパン・アズ・ナンバーワン』には「日本人にさえできたのだから、アメリカ人にできないはずがない」という形の偏見がある、と指摘しているアメリカの学者も一方でいる。
- (2) 吉野耕作（1994）など
- (3) 1994年度の国際基督教大学夏期日本語教育における文化プログラムでの歌舞伎観劇から。演し物は、市川猿之助「雙子隅田川」であった。参加者の中から、記述式インタビューで回答してもらった。ここに取り上げたのはその中の三人のアメリカ人の英語による回答である。

この文化プログラムでは、映画シリーズ、講演シリーズ、学内ワークショップ

(生け花、書道等)、学外ツアー（上記の歌舞伎観劇、座禅、自動車工場等）の4本の柱を立て、参加者の一次体験を出発点にして日本人学生達と議論したり、クラスでの発表や作文で教員の持つ認識と比べ、発展させるという方法で行われた。

参考文献

- Befu, Harumi and Kreiner, Josef ed.(1992) Othernesses of Japan: Historical and Cultural Influences on Japanese Studies in Ten Countries. München: Iudicium.
- Eagleton, Terry.(1983) Literary Theory. Blackwell.
- Iser, Wolfgang.(1978) The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response. Johns Hopkins University Press.
- Fish, Stanley.(1980) Is There a Text in This Class?: The Authority of Interpretive Communities. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Freund, Elizabeth.(1987) The Return of the Reader: Reader-Response Criticism. Methuen.
- Suleiman, Susan and Crossman, Inge, ed. (1980) The Reader in the Text. Princeton University Press.
- 川上勉編（1994）『現代文学理論を学ぶ人のために』世界思想社
- 細川英雄（1994）『実践日本事情入門』大修館
- 倉地暁美（1992）『対話からの異文化理解』勁草書房
- 奥田久子（1988）「学生中心の『日本事情』——基本的な着眼点と授業研究」『日本語教育』65号 日本語教育学会
- 豊田豊子（1988）「日本語教育における日本事情」『日本語教育』65号日本語教育学会
——（1989）「日本語教育と日本事情——現状と問題点」『日本語学』8巻12号
明治書院
- 林さと子（1989）「日本語教育における文化の問題」『日本語学』8巻12号明治書院
- 光田明正（1989）「日本語教育における日本事情」『講座日本語と日本語教育 13巻 日本語教育教授法』明治書院
- 青木保（1990）『「日本文化論」の変容 戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論社
- 吉野耕作（1994）「消費社会におけるエスニシティとナショナリズム —— 日本とイギリスの『文化産業』を中心に」『社会学評論』176 日本社会学会